

石原の文化資源ノート

—高知県土佐町の住民団体による地域アーカイブ活動—



森 啓

(いしはらの里・むかしを語る会)



本報告の流れ

1 きっかけ・目的

2 記録の方法

3 整理の方法

4 成果と課題

『石原の文化資源ノート』

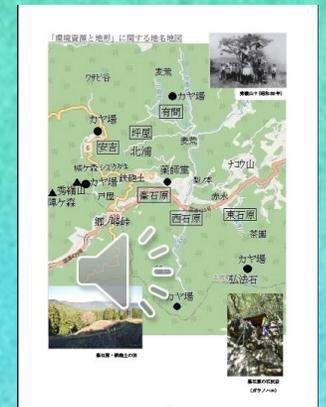
—古老に聞いた屋号と昭和の暮らし—

(A4判28頁、2021年、いしはらの里・むかしを語る会)

- ・編集者は、土佐町石原地区の住民7人・研究者2人
- ・コロナ禍の2019~2020年、古老15人への聞き取り記録をノート形式で、集落やテーマごとに地図をベースにまとめた調査メモ
- ・屋号や地名、自然、土木、生業といったミクロな文化資源に注目して、地域別・テーマ別に記述
- ・500部を印刷して全戸に配布



←冊子のほか、団体HPでも全文PDFをデジタル公開



1、きっかけ・目的

■土佐町石原地区

高知県北部の四国山地に面する自治体。町の東部の5集落が「石原地区」と呼ばれる。住民組織運営の直販市やJAスタンドを引き継いだガソリンスタンド、商品開発、大学連携など多彩な取り組みで、2021年には過疎地域の持続的発展事例として「総務大臣賞」を受賞した地域活性化のモデル地域として知られる。



「いしはらの里協議会」が総務大臣賞受賞 集落の維持・活性化に向けた取り組み評価 【高知・土佐町】



■「いしはらの里・おかしを語る会」

2019年に、「地域の懐かしい昔を語り、面白い歴史文化記録を残す集まりがほしい」と土佐町石原地域に住む畜産会社の職員や団体職員、消防署員、町役場職員、元農協職員ら有志7人で結成された市民団体。

■アーカイブ(記録)活動の原点 地域の足元・継承への目線

過疎高齢化が進み、集落の空き家も増え、消滅の危機にある小集落が出てきて、その景観が少しずつ変貌していることに危機感を持ち、地域の歴史文化を知る知識豊富な古老たちが健在なうちに記録を行って、地域の魅力発見につなげ、継承を図りたいという思いで団体を結成した。



1、きっかけ・目的

■何をアーカイブ（記録）するか？

古老たちが健在なうちに一刻も早く、地域の神社やお堂、祠、山川、城跡、古道、人物、伝承、民俗行事、屋号などを調査・記録して、後世につなげたいという目標を掲げる。

→ 博物館の学芸員から地域の歴史の講義などを受けるが、専門的知識のあるメンバーはおらず、自分たちで調べる方法が分からず、当初活動は具体化せず・・・

■研究者との出会い

調査項目の一つにあげていた地区に残る家の呼び名「屋号」について、第40回平尾学術奨励賞を受賞した楠瀬慶太さん（当時・高知新聞記者）が調べているという記事を見つけ、知人を介して連絡する。

→ 楠瀬さんは九州大学大学院で学んだ歴史学・民俗学の調査手法を地域に実装。四万十町で市民との地名記録の実践活動をしていると記事に記載

→ 楠瀬氏を同会アドバイザーとして迎え、活動が具体化へ



市民と研究者の連携

地域協働の第一歩

2、記録の方法

■九州大学式の村落調査法を実装 歴史学の社会実装

文献資料や既存研究のレクを受けた後、古文書等を使った村落調査でなく、住民でも実施できる聞き取りによる歴史民俗学的な調査方法を採用。

→ 楠瀬氏ら九州大学の大学1年生(ほぼ高校生)が使っていた簡易な大字単位の村落調査法、**九大式村落調査の聞き取りマニュアルを石原式にアレンジして使用**

■地域資源地図・地誌をまとめるというゴール

九大式調査法には、聞き取った事項を地図に記載した**地域資源地図**と、記載をまとめて**地誌(大字誌)**を作るというゴールが設定されていた。

→ 初期活動の目標「石原の地誌をつくる」

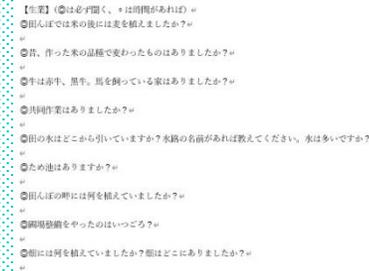
■無理ないアーカイブ活動

2019~2021年にかけて**3カ月に1回程度の継続調査**を実施。

午前・聞き取り調査、午後現地踏査、晩バーベキューのようなスケジュール

→ 仕事を抱える社会人にはちょうど良いペース

楠瀬氏と四万十町で調査実践する市民団体のメンバーが班に付き、実践を通して調査手法を学ぶ。



研究者と市民による協働調査

2、記録の方法

■地名・集落・生業・流通交通・娯楽・戦争体験

地名を書き込んだ住宅地図を広げ、計15人の古老(80~90代)に2グループに分かれて聞き取り。調査マニュアルに従い、地名・集落・生業・流通交通・娯楽・戦争体験などの順で質問し、全員がメモを取り、地図に書き込み、聞き取りレポートを作成する。

※あまり細かな所へは踏み込まない。2時間程度で聞き終わるマニュアル



峯石原調査レポート 中町幸蔵
 作成日 2021年 2月28日
 調査日 2019年 12月8日
 調査人 中町幸蔵 竹内文治 山下秀雄
 聞き取り対象者 窪内 和 昭和7年9月6日生まれ 87歳
 ○聞き取り対象者の履歴
 峯石原 東班 屋号いなきた
 4人兄弟の次男 姉1人 妹1人 長男病死により家を継ぐ
 石原小学校卒業後山仕事、土建業、兼業農家で生計
 父貞喜は石工の土方
 ○屋号は、別紙 東班 板木班 西班記名
 ○本部落は全戸地福寺の檀家で神式(神道)はなかった
 ○本部落では、おひまち(月日祭)を旧9月28日地区公民館にて全戸参加し寺福寺に
 住職を迎え実施。当日当番が掃除準備した荒神祿、小島様を参拝した
 ○7月1日は地区全体が集まり田休みが行われ、7月2日が神祭があり、二日間の農
 休日となった。
 ○旧7月6日は薬師堂の大祭が催され、昔は相撲大会や手踊りが行われ土佐山、本山
 から来ていた。音音機で歌の大会、マイクを使い和さんが司会をした。相撲、踊
 りがなくなり銀杏の木に幕を張り活弁士がきて映画をやった。
 ○長野谷、平見川、なこね川、小石川流域は棚田だった。長野谷は戸屋 城まで棚田
 だった。
 ○てっぽうつちの上の谷に大池、小池があり大きな鯉がいた。かもが飛来し鴉をした
 牛は全戸1~2頭、役牛として飼育されており、田耕し荷物の運搬をした。
 田の畔では大豆を作り、味噌、醤油、豆腐に利用した。
 いい(結い)と言う共同作業があった。

■屋号はメンバーが個別調査

屋号については、調査日にも聞くほか、別途メンバーが地域で聞き取り。

→ 少子高齢化で多くの家が無くなる中、かつての集落の形や営みを記録する重要な機会に。

屋号調査台帳

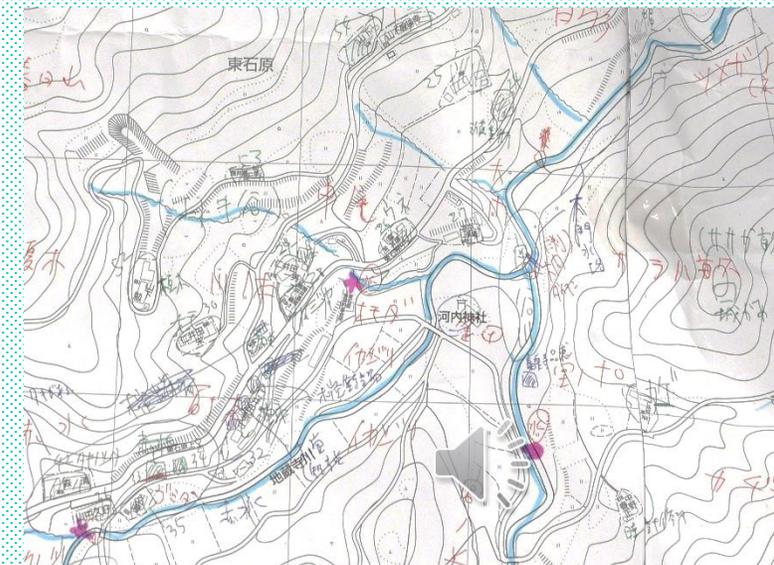
地区名 峯石原

調査員 竹内文治 神野 隆 山下秀雄 窪内 和

調査日 2019年10月19日

協力者 村武利 窪内 和

No.	屋号	大字	小字	番地	世帯主	備考
	なみや	東石原				
	たじろ	土佐町	東石原			
	おやま	土佐町	東石原			
	おのくぼ	土佐町	東石原			
	いいや	土佐町	東石原			河内神社
	いた	土佐町	東石原			
	おの	土佐町	東石原			
	長谷	土佐町	東石原			
	おん	土佐町	東石原			
	マツバ	土佐町	東石原			
	松葉	土佐町	東石原			
	いん	土佐町	東石原			



3、整理の方法

■活動助成金の獲得

高知新聞厚生文化事業団の文化助成に応募(10万円)し、競争を勝ち抜き採択。

→ 地誌と資源地図の成果をまとめた冊子「文化資源ノート」の発刊を構想。



■編集会議を3回開催

編集者としての研究者の役割

調査レポートを持ち寄り、記載を統合してまとめ、地域文化の継承のために、載せたいことを決めていく編集会議を3回実施。冊子に載せる地域の写真の撮影なども同時並行。聞き取りで借りてきた写真アルバムなども活用。

■デジタル公開も見据えホームページも開設

Googleサイトを活用し、Googleアカウントを持つメンバーが共同編集できる形に、冊子に載せられなかった古写真などは「思い出写真館」としてHPに載せていくことに。



4、成果と課題

- コロナ禍の高齢者への聞き取り調査の難しさ（パーティション）
→ 住民主体だからこそできた記録。
- 多くの古老が故人に。戦前や戦後すぐの集落の記憶を聞き取る最後の機会だったかも。
- メンバーがかつての集落の形や営みを知り、地域で話す重要な機会になった。
- 冊子にして全戸配布や出身者にも送ったことで喜ばれた一方、
記載抜かりや内容への指摘も
- 楠瀬氏の多忙化もあるが・・・
アーカイブ（記録）後の活動が課題。
史跡めぐりなどや峠道の踏査など今後の展開
- アナログの地図のデジタル化など、まだ調べたいこと、できることはたくさんある

